
妖法番

深山真人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖法番

【Nコード】

N8192G

【作者名】

深山真人

【あらすじ】

妖あやかしとは、人の世にある異形のことだ。おそよ全ての人間には、彼等に抗うどころか見ることも不可能である。そして妖の法となるべく創立された「妖法番」。彼等の禁忌として生まれた竜峰みずちは、人でありながら、既に異形の道を進んでいた。

第一話

人の無き、影の月。

音無く蠢きし、異形の生。

彼を収めし、人の子ら。

妖の法と、自らを呼び。

十二月。その日は珍しく、雪が降らなかった。

日付が変わってから、二時間と少し。月は満月に隠れて、そこを照らすのは人が造った街灯。閉じられたシャッターの続く、商店街。人間はおよそ寝静まったこの時間に、二つの影が滑るように移動した。

片方は人。黒で統一した服に、灰色のコートを羽織った、それは男だ。無駄なく鍛え込まれた肉体の、追跡者。黒い影を追う男は、足音も無く駆ける。

男には左腕が無かった。そのため左の袖は、所在無しに風に吹かれて舞っている。軍人のように刈り込まれた黒髪が、男の屈強そうなイメージを更に引き立てている。

彼が追う影。およそ人間とは思えない、歪んだ肉塊のような生物。思わず目を覆ってしまう醜悪な顔面に、素人の木彫りが適当に穿ったような一對の孔。目蓋の無い瞳は、常に血走っていた。切り傷のように細く、真一文字の恐らくは口から、シューと空気の流れる音。無意味に巨大な顔と、それに反比例するように細い体は、全身がぼろ布のような黒い衣服で覆われている。朽ち果てた亡者に、腐った豚の頭蓋を縫い合わせたら、多分よく似たモノができることだろう。最も、この不気味なほどの身体能力は再現できないだろうが。

ふっと身を沈めたかと思うと、肉塊は七メートルほど跳躍した。次いで、追跡者も同じように跳ぶ。

ヒュン

まだ生えている右腕を、男は何かを投げるように振った。そして、右手の先から出現した槍の穂先　ガラス細工のように透明で壊れやすそうな刃が、肉塊へと迫る。

刹那、

「じ……ぼ……」

声とも取れない音を発して、肉塊は消滅した。宛てをなくした刃は、真っ直ぐと突き抜け、消滅する。

男は気にした風でもなく、アスファルトで塗り固めた地に降りると、数秒間立ちすくんで、歩き出した。

同じ頃の数キロ離れた公園で、肉塊は現れた。明らかな疲労が見え、おぼつかない足でふらふらと公園内を歩く。だが少し歩いたところで、肉塊は立ち止まり、振り向いた。

二メートルほど先には、先ほどの追跡者と同じ格好の男が立っていた。

違うのは、男の年齢と肉体だ。両の腕はあるべきところに存在して、精悍な顔には僅かな幼さが残る。青年と呼称したほうが良いだろう。長い黒髪は、首の後ろで一つ結んであり、そこから腰まで黒い流れが続いている。

肉塊と青年は、互いに微動だにしない。夜風と、肉塊の口から漏れる呼吸音。彼らを気に止めない。辺りには、冬の冷えた空気が満ちていた。

先に動いたのは、肉塊だった。

滑るように青年へと迫ると、骨と皮だけのような手で拳を握り、細い首へと風を切って伸ばす。

殺した。

肉塊がそう直感する。が、鉄の硬質を持つ拳は、青年の首から十センチで遮られた。あの追跡者の刃と同じ、右手に握られている透き通った儂い剣。両刃の峰で、青年は必殺の技を防いだのだ。

瞬時に肉塊は飛び退く。距離を保ち、青年の出方を窺った。

青年は、無造作に剣の刃先を肉塊へと向ける。即座に対処できる
よう、肉塊が身構えた時だった。

ピシッ

肉塊の立つ空間。何も無いはずのそれが、鳴った。窓ガラスにヒ
ビが入ったような、静かな悲鳴。数瞬後、

パキイイイ……ン……

空間が割れる。

肉塊を囲むのは、数十の剣。柄は無く、刃だけの武器。

青年の持つものと同じだ。まるで鏡のような、いや、それ以上に
一種の宝石に思える、透明な処刑道具。

肉塊に反応する猶予は無かった。

出現から約二秒。無数の刃は同時に肉塊の全身を貫き、消えてい
った。現れたときと同様に、それは唐突以外の何でも無い。

崩れ落ちる肉塊は、醜い顔が地に着くと思われた瞬間に、灰のよ
うに消えていった。

「終わったか」

言葉を発したのは、青年ではない。彼が振り返った先にいる男、
先ほどの追跡者だ。どうやってここまで来たのか。青年と肉塊が対
峙したのは、一分足らずのことだ。どれほどの速度で走っても、数
キロ離れているこの場には来れないはずだ。

この男も、あの肉塊のように空間移動が可能なのだろうか。

「ああ、終わったよ」

さして興味も無いように、青年が言う。吹き付ける寒い風に、髪
が揺れる。

「今日で五体目だ」

「そうだったか」

「ああ」

へえ、と青年は呟く。何故か、その顔は浮かない。

「……あまり、嬉しそうじゃないな。みずち、もう少し喜んだらど
うだ」

「……」

みずちは言葉を探すように、沈黙した。

「……また、一人殺したんだ」

「仕方無いだろう。奴を放っておけば、また犠牲者が増えるだけだ」
あの肉塊は、これまでに四人の人間を殺していた。人では無い異形。彼等は何時の頃から「妖あやかし」と呼称され、この世に生きてきた。多くの妖は、人里離れた住処で暮らす、稀に人の世に出てきてはその営みを脅かす者もいる。

妖に対して、普通の人間は無力である。

そして、人間と妖の双方に対して調和をもたらす為、妖に対抗できる能力のある者、その内でも別段と優れた者達によって、「妖法あやかしほ番うばん」と呼ばれる組織が誕生した。みずち達は、その妖法番の中核を務める「竜峰家」の人間だった。

「芳禅ほうぜん……でもそれは、俺も蛟も望んでない。」

俯いて、みずちは言葉を発した。

彼が言った蛟とは、彼のことであり別人のことでもあった。俗に言う、二重人格者に近い。彼には、人間であるみずちと、妖である存在の蛟とがある。

どちらも別人だが、同一人物でもある。

「蛟は、また泣いてるよ」

「……」

自身の中に宿る意識の言葉を、みずちは芳禅へ伝える。意思があれば蛟本人と代わることもできるのだが、彼はそうしない。恐らくは、いま泣いているという蛟が、それを拒んだのだろう。

芳禅はかける言葉も無く、ただ佇んでいた。

微妙な沈黙が流れ、やがてどちらからとも無く歩き出した。みずちと芳禅、そして蛟。三人は夜の闇に溶け込むように、音も無く消えていった。

妖法番の歴史は、人間の創った組織において群を抜いて古く、そして偉大なモノだった。鎌倉の時代には既に存在し、強力な十の家系を中心にその勢力を広げてきた。

物質の具現と、独自の剣術を扱う竜峰家。タツミネ

千里眼を持ち、妖との共存を願う風見家。カザミ

風見に賛同し、槍術と妖の召喚術を得た宮慈家。ミヤジ

規則に縛られず、自由に生き、そして死ぬとした鴉麻家。カラスマ

陰陽道から派生した、強力な独自の術を駆使する汐凧家。シオナギ

伝統の長刀と幻術によって、妖を一閃に伏す霜霧家。シモキリ

共存より討伐を選び、風見から霜霧へと鞍替えした分家、風松家。カザマツ

妖と交わった混血の吸血種、大東家。ダイアスマ

様々な武器を扱い、対妖に特化した弦家。ゲン

そして、全ての妖法番と封印された禁術の研究、会得を続けている尊瞑家。ソンメイ

永い時の中で、大小様々な犠牲を出しつつも、彼等は生き残り、存在している。自らを妖の法呼び、戒めることでその調和を得ている。

この十家には、決して犯してはならない禁忌が存在した。それは別段特別ではなく、十家ではなくとも彼等に多少の知識がある人間は、誰でも知りえる事。

他の家系との婚約である。

人を超えた力を持つ彼等にとって、異なる二家が変わるといふことは、妖をも超える脅威に成りかねなかったのだ。

そしてそれを犯して誕生したのが、今は自室のベッドの中で眠る竜峰和羽であった。たつみねかずは彼は竜峰と風見 妖法番の中で討伐派と共存派と称される勢力の、在るはずのない混血として生を受けた。

千里眼こそ受け継がれなかったが、竜峰の具現術「龍の爪」とそれをを用いた「無元流」むげんりゅう 剣術、風見の「射断流」しゃだんりゅう 弓術の血は、色濃くその肉体に流れている。

異端児として捨てられた彼は、竜峰家元二十九代頭首候補「竜峰たつみね ほうぜん

芳禅」に引き取られ、妖法番の竜峰として育てられた。

だが和羽が五つを迎えた日、事は起こった。かつては水神と称えられ、畏怖の対象となった大妖怪「蛟」^{みずち}が復活したのだ。

眼前に現れた蛟を、芳禅は退けることに成功する。だが、消滅までには至らなかつた。瀕死の蛟は肉体を捨て、幼い和羽へと憑依した。水神は、そのまま和羽を乗っ取るつもりだったのだろう。しかし不幸中の幸いか、規格外の混血の子供は、逆に蛟を捕らえる檻となつた。

芳禅との戦闘直後ということもあり、疲労した蛟には和羽を乗っ取るどころか、そこから抜け出すことも出来なくなつてしまつたのだ。諦めた蛟は、和羽を道連れに自害しようとするが、それより早く、芳禅は和羽ごと蛟を呪つた。

芳禅の呪いは、強力で解くことは不可能とされる禁術だつた。和羽という名を消し、代わりに蛟の読みである「みずち」という名を与え、大妖怪を少年の人格の一つとする。つまりは、一人の二重人格者を生み出すということだつた。

呪いは成功し、竜峰和羽は竜峰みずちとしての人生を歩み始めた。そして和羽の名を捨てたと同時に、みずちは和羽であつたときの記憶を失つてしまつた。

そして十歳の時、みずちは初めて龍の爪を発現させ、芳禅から全てを聞かされた。だが僅かな記憶すら無いみずちにとっては、和羽という自分は別人でしかなかつた。事実、五年という月日の中で、みずちと蛟はある種の信頼関係も築けていた。

芳禅の話に二人は気の無い返事を返し、改めてみずちとしての人生を決定した。別段に大したことでは無く、ただ当たり前前に妖法番としての生活を歩むこと。しかし芳禅にしてみれば、どれだけ救われたことが分らない。声も出さず泣く隻腕の男を、少年は不思議そうな顔で覗き込んだ。

それから、七年の月日が流れた。

芳禅の隣に立つるのは和羽ではない。妖の名を持つ、全く別の、も

しかししたら人間ですらない存在だった。

公園での戦いから時は経ち、時刻は午前の九時を回った。誰も気に止めないような、小さな屋台の居酒屋に、芳禅の姿はあった。

木製のカウンターとも呼べない台の端には、小型テレビが特別企画のカルト番組を放送している。自称心霊研究家やらUFO研究家が必死に熱弁するのを見て、芳禅は細く笑った。

「驚いたね」

芳禅の向かいに腰掛ける主人

からすまあきみつ

鴉麻秋光は煙草を啜えたまま呟

いた。日焼けした額にタオルを巻いた格好は、今時珍しいほどの中年姿だ。

彼に言わせれば、一種のカモフラージュらしい。それも真実といえ、そうなる。寂れた屋台の主人が、妖法番の重鎮などと考える人間がいるはずもないのだ。

およそ腕が立つとは思えない細身。鴉麻家系を見分けるのに最も簡単という、一部のみの白髪はスキンヘッドに刈られている。優れた探査能力を得ていなければ、能力者でも気付けない。

「何がだ？」

「あんた、というか竜峰の人間が笑うとはね」

皮肉とも取れる言葉に、芳禅は笑って返す。

「心外だな。俺達も人間だぞ？ それにみずちはよく笑っているだろ？」

「あいつは混血だろ。お優しい風見の、あの白羽の血が流れてんだ。あんたみたいに無愛想なわけねえだろ」

「確かに、な」

良質の氷で割った焼酎を、一口体内へと流し込む。それを待つてから、秋光は続けた。

「で、そのみずちは？」

「寝ている。昨日の仕事が疲れたらしい」

「……そうでもないようだぜ」

秋光は、顎で芳禅の背後を示す。振り返ると、みずちが立っていた。

「起きてたのか、みずち」

驚いた口調の彼に、青年は呆れたように言った。

「年上には敬意を見せる、片腕坊主」

「なんだ、蛟さんか」

安心した、というより興味を無くしたように言って、芳禅はテレビに向き直る。

「連れないのう。おう、渡り鴉もいるな」

言いながら蛟は席に着く。声は変わらないのに、口調だけでも雰囲気が変わってしまう。それも二重人格の特徴なのだろうか。

彼に会うたび、秋光はいつもそんなことを考えた。

「いたらお邪魔ですかい？」

「まさか。ここはお前さんの店だ。言うなれば、それは儂の台詞じやろつ」

無遠慮な妖の言葉に、秋光の頬が緩んだ。

「そりゃあどうも。ついでにご注文でも伺いましょうか？」

「焼酎を、氷で頼む。酒は任せるが、なるだけ安く強いやつを」

「はいよ」

数十秒して、芳禅と同じような液体の注がれたグラスが置かれた。

「あまり飲み過ぎんで下さいよ」

芳禅が言い終わる前に、既に蛟の酒は半分となっていた。

「何故？」

「あんただけの体じゃないんだ。二日酔いで登校するのはみずちですよ」

「馬鹿だのう、芳禅。一昨日から冬休み言っもんが始まっころつが」

「え？」

秋光を見ると、彼も黙って頷いた。

「お主、普段は抜け目ないというのに、こやつ的事となると抜けと

るのう。じゃから毛も生えんのじゃ」

「……これはこういう髪型なんでね」

ばつの悪そうな芳禅。蛟はほう、と冷やかすように呟く。

「そういえば」

思い出したように、それまで二人のやり取りを見ていた秋光が言った。二人の視線が集中する。

「なんであなたが？ みずちの許可があつたんですかい？」

秋光の指摘は最もだった。

蛟は単なる人格に過ぎず、意思の主権はみずちの側にあつた。彼の許可無くては、蛟は指の筋肉一つ動かすこともできない。

「寝とる人間とどうやって話す？」

「……なんだと？」

芳禅の声音が、一瞬で変わった。同時に目つきも険しくなる。秋光も同じだ。

「蛟さん、どういうことだ？」

「ふうむ」

場が張り詰めても尚、蛟はのんびりと酒を含み、続けた。

「最近になってじゃが、稀に儂の意思だけで交代することもできるよつになつてのう。どうやら、こやつは余程、儂に気を許しておるよつだ。試したことはないが、儂本来の力もある程度は使えるよつじゃ」

「あんだ、まさか」

反射的に、二人は身構えた。だがそれでも、蛟の態度は変わらない。むしろ二人に呆れ、馬鹿にするような顔をした。

「童が。身構えるでない。今更になって世の中ひっくり返そうとするほど、儂は執念深いもんで無い。それに、稀にとつたじゃろう。未だ主権はこやつが持つとる。恐らく、この先もずっとな。こやつが意思が無ければ、儂は今までと変わらんよ」

「……本当か？」

探るように、秋光が言った。まだ、明らかな敵意が剥き出しとな

っている。

「しつこいのう、秋光。お主、鴉麻の家系の割に五月蠅い奴じゃ」
「そいつは……どうも」

ようやく警戒心を解いた二人は、大きく息を吐いて酒を流し込む。極度の緊張が解かれたため、額には汗が滲んでいた。

「まったく、心臓に悪いですな」
搾り出すような芳禅の言葉も、蛟は余裕の表情で嘲笑った。

「何がじゃ？ 主ら二人の尻が青いというだけであるうが。特に芳禅。お前さん、仮にも元は竜峰の頭首候補であるう。それほどの男が、こんなもので良いのかのう？」

「ちよつと、俺は元頭首なんですが？」
「面倒だと、半日でそれを投げ出す男が、果たして言えたものかのう？」

「……そいつはどうも」
力無くヘラヘラと笑い、秋光は酒を継ぎ足す。

「ときに」
蛟がまた切り出す。またしても二人に緊張が漲る。が、

「この番組はなんじゃ？」
「……」
「……」

予想外の答えを、いつもよりも数秒遅れて理解してから、共に脱力した。

「おい、答えんか。このゆうえむえーとかいうもんは何なのじゃ」
何故かはしゃぐ子供のように、蛟のテンションは高かった。

「……UMAって書いて、ユーマって読むんですよ。未確認生物とかいう奴等の総称です」
「未確認生物……妖の類いか？」

「そうそう。蛟さんとかね」
今度は芳禅が嘲笑って、蛟を茶化した。がしつと、蛟の手が肩を掴む。

「すいません」

「よかるう」

あつさりと手を放し、また新たなアルコールを飲みにかかる。

それから談笑しながら互いに少しずつ飲み、三十分ほどの時が経った頃だった。最初に気付いたのは、蚊だった。

「秋光」

「ん？」

四本目の煙草を啜えて火を点ける、寸前に声をかけられ、何気なし青年姿の妖を見る。芳禅も同じだ。

「また、鴉が増えおつたな」

その後、

「ようつす」

「お、俊悦しゅんえつじゃないか」

暖簾をくぐった鴉からすましゅんえつ麻俊悦は、周囲を一瞥すると軽く会釈をして席に着く。自由で有名な鴉麻の生まれにして、拾った子ではないかと思うほどしっかりとしたこの男は、日本警察の捜査第一課において警部補、つまるところの刑事として活躍していた。

前髪の右半分が白くなった比較的筋肉質であろう俊悦は、いつも砂漠の砂色をしたトレンチコートを着込んでいる。一課に配属され、初めて容疑者を捕らえた時に、記念として上司から贈られたもののことだ。

水割りを注文してから、彼は芳禅と蚊に向き直った。

「久しぶりだな、芳禅。それと…蚊さん」

「いかにも。さすがだのう」

「全く、なんでわかるのかねえ」

カランと、四つのカップが打ち合う。

芳禅は、内心舌を巻いて言った。言葉を交わす前に蚊と気付いた俊悦は、その探査能力もさることながら、刑事としての洞察力も侮れない。

「お前は戦闘に特化し過ぎなんだよ。空間転移術を身に付ける前に、

まず妖探知能力を修行すべきだったんだ。禁術は強力だが、負担もでかい。特に転移術じゃあ、だいぶ限定されるだろう」

まるで教師のように言い聞かせ、俊悦は疲れた体にアルコールを染み渡らせてゆく。

「それはそうと、昨日はご苦労だったな。相手は何だった？」

「タチの悪い魍魎じやうりやうだな、あれは」

彼等が言うのは、昨夜みずちが倒した妖のことだ。元々、あの妖は俊悦が芳禅達に依頼したもので、先月から続く無差別殺人事件の正体だったのだ。

「魍魎じやうりやうね。多いな、最近」

「じゃが、解せん」

低い声で、うめくように蛟が言う。

「あの魍魎じやうりやう、転移しよったぞ。それも芳禅に引けを取らん、長距離を」

「本当か？」

思わず身を乗り出す俊悦に、答えたのは芳禅だった。

「ああ。それに姿も違った。奴等は普通、幼児に似た鬼の外見だ。

だが昨日のは、見た目通りの化物だった。それこそ

指でテレビを指す。

「これに出てくるUMAだな。最も、単に乗り移った死体に変化しただけかもしれないが」

「それにしたって、蛟さんほどの大妖怪はともかく、そこらの妖が禁術を使えるかね」

「無理じゃな。儂がて魂魄転移には百余年を費やした。芳禅、主は？」

「三十と五年ほどだ。それも、尊瞑家そんめいけの妖力室に引き籠もってな」

四人は、それぞれ唸って思考を始めた。それほどに、これは深刻な事態の可能性があるのだ。

魍魎じやうりやうというのは、力の強い妖ではないのだ。死体を喰らうと言われるが、人を殺すことは無い。妖力としても精々弱い幻覚を見

せるのが精一杯で、禁術の域である高位妖術を使役できるはずもない。

「関連があるかわからんが」

秋光が言った。

「三日前、鴉麻本山からの情報が入った。なんでも東洋魔術と西洋魔術の併用、とういうか融合を行なって、新しい術式を研究しているカルト教団があるそうだ」

「新しい術式……」

「して、そやつらは何者じゃ？」

質問に、秋光は首を振った。

「詳しくはわからん。本拠地はカナダの何処かにあるそうだが、確かなことは何一つ出てこない」

「遠いな……」

呟くように、芳禅。

「遠い異国だ。尊瞑家は何も？」

「動いてはいる。特に御琴みことの嬢ちゃんかな。選抜した術師と、自ら

“月の兔”を使って状況を探っている」

「初耳だな」

それまで黙っていた俊悦が、口を開いた。

「頭首自ら……それほど深刻とは」

彼は件のカルト教団については、秋光と同様に多少の情報を得ていた。しかし尊瞑家現頭首、尊瞑御琴そんめいみことまでも気にかけているとは知らなかったのだらう。

「御琴……やつは元気でやつとるのか？」

「そりゃあもう。歳と不相応にしっかりしてるよ」

御琴は、尊瞑家発足から三人目の天才と言われるほどの人物だった。芳禅と蛟。正確にはみずちのほうだったが、彼等も面識があった。二年前、ある事件にみずち達が時に、御琴本人と会って話したことがある。

尊瞑御琴はみずちと同じ十七歳の少女だ。八歳で三種類の禁術を

会得し、その際に色素が抜け落ちた白い髪をしていた。その純白の流れと同様に、色白で華奢な身体つきの、まるで端整な人形だった。ある種、人外の美しさを持った彼女を、そう簡単に忘れることはできない。

「まあ、そうでなければ困るがのう」

蛟は、ほくそ笑んで呟いた。だが他の三人は、依然として暗い顔つきのままだ。

「秋光、御琴が“月の兎”を始めたのは何時だ？」

「今日で十日ほどのはずだ。少なくとも、一週間は経っている」

月の兎とは、尊瞑家頭首のみが会得を許される、最高位の禁術である。この世のあらゆる事象を覗き見ることができ、さらに術者が妖力を増やせば、それらに干渉することも可能となる。つまり、芳禅達が話すこの瞬間に、突如として御琴自身が出現することも、逆に彼等全員を尊瞑の本山へと転移させることも可能だ。

それを十日間。無論、僅かな休憩を挟んではいるはずだが、心身ともかなりの負担があるはずだ。そして、未だ大した情報を掴めないとは、

「でかいヤマ、だな」

「ああ。でかすぎて嫌になる」

「だな」

三人が再び頭を傾げたが、蛟だけは違った。

「面倒な話じゃ。儂は帰る」

「は？」

「え？ おい、ちよつと、蛟さん！」

呆気にとられている三人が呼び止めようとしたときには、既に蛟は屋台から数メートル離れていた。

「つたくもつ。しょうがねえ、俺も行くぜ」

「あ、ああ」

言って芳禅が立ち上がるうとした。その時だった。

「あ、ちよつと待て、芳禅」

「ん？」

思い出したように、秋光が屋台の下を探る。取り出したのはほそ長い形状の、杖のようなものだった。

全長およそ九十センチ。丁寧に編みこまれた、紅い布の柄。鞘は黒塗りで、一見すると日本刀のようだがその独特の湾曲は無く、計ったように真つ直くと平行に伸びていた。

「！ 出来たのか!？」

「苦労したぜ。あれだけ原型を留めてなかったんだ。今のお前じゃ、具現術だけつてのは辛いだろ」

秋光はそれを引き抜くと、反転させ、柄を芳禅へ向けて差し出した。受け取った芳禅は、思わず感嘆の息を漏らした。

「なんだ、それは？」

秋光に続いて出てきた俊悦が、芳禅に尋ねた。

「大包平^{おおかねひら}。平安に造られた刀だ。昔……左腕があつた頃に、俺が使っていたものでもある」

懐かしむように、芳禅は呟く。

反りの無い、直線状の刃は銀に煌く。西洋の刺突剣を思わせる形状だが、それとは比べ物にならないほど強固で、堅牢そうな姿だ。刀身には細かく、何かの文字を綴ったような細工が施されている。

秋光に背を向けた芳禅は、軽く大包平を振るった。剣は外見からは想像できないほどに軽く、夜の闇に銀の一閃を曳いた。まだ完全には手に馴染まないが、それもすぐに無くなるだろう。

数分間、大包平を振ると、芳禅は礼を言つて秋光に渡す。彼がそれを鞘に入れると、再び芳禅が受け取る。

「右手まで失うなよ」

「ああ」

それだけ交わすと、大芳平をベルトの左側に差し込んだ。ベルトはこの剣を使っていた昔と変わらず、大芳平を固定するための小型ホルスターに似たものを取り付けてある。

「ようやく、竜峰は復活か？」

「さて、どうだろうな」

言って芳禅は、青年と同じ方角へと去っていった。

「ところで、秋光」

男の姿が見えなくなるのを待って、俊悦はある事を切り出した。

「お前、酒の代金はいいのか？」

家の扉を開けて、芳禅は気付く。秋光に代金を払っていなかった。しかし、今から引き返すのは面倒だ。それに秋光自身、何も言っていないかったのだから問題ではないだろう。

同時刻に悲痛な叫びを上げて、俊悦の笑いの種になっている秋光のことなど知らず、芳禅は部屋に向かった。だが、

「む……？」

ドアノブを回そうとして、異変を察知した。部屋から物音はしない。しかし、気配がある。

妖か。

狭い室内では、大包平の長い刀身は不利になる。龍の爪を放てるように、気を集中する。空間が僅かに揺れるのが分かった。

いけると踏んで、ドアを開こうとしたとき、

「よせ」

芳禅を制したのはみずちだ。彼は、自分の部屋の前に立っていた。

「うまく探れない。多分、やり手だ」

「どうする？」

口調からみずち判断して、芳禅は尋ねた。

「俺がドアから行く。開けたら奴の背後に転移してくれ」

芳禅が頷いたのを見て、みずちはタイミングを計る。ドアの前に立ち、いつでも中の者を刃で包囲できるよう、集中してノブに手をかけた。

「三秒数える。…三……二……一……」

ドン、と開け放ち、みずちは瞬時に標的を視認した。床に転がっ

ている、というよりも倒れているような格好だ。同時に芳禪が空中に現れ、抜き放った大包平の刃先を向ける。が、

「！ 違う！！」

「！？」

僅かに紙一重で、刃は止まった。

「まさか！？」

自分が殺そうとした者を認識して、芳禪は驚きの声を上げた。

「それより手当てだ！」

言うや否や、みずちは素早くそれを抱き上げると、呼吸を確認する。息はあるが、浅い。顔は汗で濡れ、衰弱しきっている。

「どういうことだ……」

か細い息をする巫女装束の少女を見て、みずちは唸るように言った。

肩まで伸びた白い髪と、それに負けないほど色白な肌が、月明かりに照らされる。

「御琴……！！」

みずちは少女の名を呟く。

いま彼が抱きかかえているのは、尊瞑家頭首、尊瞑御琴そんめいみことその人だった。

第二話

時は少し戻り、三十分前。尊瞑家総本山の妖力室では、若き頭首「尊瞑御琴」と選抜された七人の尊瞑家術師が集結していた。

最近になって存在が明らかになった、巨大カルト教団。名前も所在も不明だったが、ようやく彼等の目的が判明しつつあった。このカルト教団は単なる狂信者の集団でなく、世界中のあらゆる魔術組織から追放された者達、禁忌を犯した者や、魔に囚われた者が集まった危険な組織であった。

ただのアウトロー集団ならば、妖法番が気にかけることはない。だがこの組織に迎えられたのは、それぞれが平均的な術師や退魔師、霊能力者を先天的および後天的に大きく上回っている、いわば天才と呼ばれた者達なのだ。中にはかつて、妖法番の十家だった人間もいるという。

そして彼等の目的は、現存する全ての魔術を、禁術種すらも退ける新術の完成。だが、それは教団が持つ目標の、ほんの一部であるという見方が強い。むしろそれ以上の何かを掲げていると推測したほうが、正しい判断と言えよう。

単なる術の研究ならば、それほどの面子を揃える必要も、揃えられる道理もない。個人研究でも、可能といえば可能なのだ。だがそうはなっていない。

多くの強力な人材を確保でき、それらを統率できる資質と目的を備え、尚且つその全てを秘密裏に隠し通せる人物。そういった人間を野放ししておくのは、ある意味で妖という存在以上に危険だ。

妖法番の情報統括である、鴉麻家。彼等からこれを聞かされた御琴は、すぐに尊瞑家の精鋭術師を選抜し、禁術“月の兎”の補助を担当させていた。そして今日で、この禁術は十一日目を迎える。

「ふう……」

肩まである白い髪と、それに負けないほど色白の肌。染み一つ無

い、尊暎家伝統の巫女服を着た御琴は、大きく息を吐くと胸元のペ
ンダントを握った。まだ先代の頭首、御琴の父が活躍していた頃、
ある女性から貰ったものだった。

御琴はこれに余程の思い入れがあり、着替えや入浴以外で外すこ
とはない。軽く丈夫な金属製で、黒色のリングの中に銀の十字架が
埋め込まれている。十字架には、御琴の知らない異国の文字が彫ら
れ、これ自体が強力な魔除けとなっているという。

「頭首、準備は整いました」

御琴の側近である尊暎皇馬そんめいこうまが、いつもの落ち着いた様子で言った。
元は尊暎の分家出身であるこの男は、今年で六十になるというの
に全く衰えを見せなかった。この総本山にいる人間で、御琴に次ぐ
実力を有していた。多少の白髪が混じった黒髪は整えられ、それま
でに彼が生きた人生を物語るような火傷跡が、細く鋭い右目に残っ
ている。

御琴はこの男に近寄るのが、あまり好きではなかった。彼のこと
が嫌いというわけではない。御琴が生まれたときから世話をしてく
れるし、御琴が独りの時には進んで遊び相手にもなってくれた。感
謝してもしきれないほどの恩を、彼女は感じている。

しかし、十七歳の標準を遥かに下回って百六十センチ弱の小柄な
御琴では、百八十を超える皇馬と並ぶと、どうしてもその差が強調
される。ほとんどの事柄を気にもかけない御琴にとって、自分の身
長はたった一つのコンプレックスだった。

「…では、始めましょう」

言うと同時に、御琴の体は淡い蒼色の光を灯した。決して強い輝
きではない。雲の無い夜、月が発する光によく似ている。静かで、
神秘的な、それは妖艶だ。大自然が形成した洞を元に加工した、岩
に囲まれているこの妖力室全体を照らす。

「積雲の風、見ることを叶わず。翼天の空、触れること無く」

妙に透き通る声が、詩典“月の兎”の一説を唱え始める。

「芽吹く大地を高らかと見下ろし、されど干涉すらも許されず。」

猿は実を、狐は魚を、兎は其の肉を。捧げた身には、塵すらも無き……”」

光は少しずつ、だが確かに強まってゆく。詩を読み上げること、室内の温度は徐々に下がり、冬の夜に立つような感覚に陥る。

やがて五分、十分と時は過ぎ、御琴は最後の一説を口にしていた。

「……水面を風いだ、白百合の香。思い出に残らず、存在として生を受け、虚無として還るのみ。今はただ、遥かな月へと、其の影を映す。」

ふわつと、光は御琴を離れ、宙に浮かんだ。瞬く間に光は収束し、一つの球体　小さく、淡く、それは輝く月となった。

「……これまでと同じく、干渉はしません。術の行使は情報収集が目的とします。…わかっているとは思いますが、今一度、肝に銘じておいて下さい」

御琴を囲むように立つ七人は、静かに答えた。頼りがいのある彼等の声を聞きながら、創り物の月を見つめる御琴はふと思う。

これが「月」なら、わたしは「兎」なの？

ふつ、と短く笑って、御琴は悲しげに目を伏せた。

わたしが、そんな高尚なわけが無い。ただ狡賢いだけの、子供だ。

御琴はまっすぐと月を見やり、静かに語りかける。

「観測せよ」

言葉を持たない月は、ふわりと巨大化を始めてそれに答える。やわらかな球体が、御琴の小さな体を包み込んだ。

重力から開放され、視認できない鎖が解かれる感覚。瞬間、彼女の意識はこの星を、地球を見据えていた。肉体は無く、精神だけがそこにある。

見つけないと。

地上に降りようと、意識を集中した。瞬時に視界が切り替わり、空の上から大地を見下ろすようになる。それまでと同じく目標の妖力を元に、教団の本拠を見つけ出そうとする。再び集中を始めようとした、その時だった。

「ほう、これが彼の有名な禁術か」

耳元で囁く、しゃがれた男の声。

「!?!」

ぞくりとする圧倒的な恐怖を感じ、御琴は術を瞬時に中断した。精神はあるべき肉体に戻る。だが強制的に終了したため、ずしりと何かが押し掛かっている感覚と、瞬間的な激しい頭痛に襲われた。

「うっ!」

苦痛に耐えられず、御琴は倒れこんだ。

「くっ…! はっ……!!」

「頭首!?!」

皇馬が素早く反応し、駆け寄ろうと

「来ないで!」

御琴が叫ぶと同時に、彼は硬直したように立ち止まる。そして、御琴の傍らに立つ者を見た。

「貴様…!」

「動くなよ、皇馬」

名を呼ばれ、皇馬は生涯で数えるほどしか体験していない、恐怖を覚えた。いや、覚えたのではない。思い返された。彼は、この男を知っている。

男は初老ほどで、白髪は老いによるものだろう。黒と見間違えるような藍色で統一された、かつての武士のような着物姿で、履物も足袋と草履だ。右手に携えた刀は、この男と同様に皇馬がよく知る名刀 真改しんかいである。

鋭い刃先を御琴の首筋に突きつけたまま、男は言った。

「こんな形で再会するとは……運命さだめとやらも存外、酷くはないな」
皺のある顔の、細い口元がにやりと歪んだ。

「そして、久しいですな、御琴様。私を覚えておりますか?」

「くっ……ええ、はつきりと」

苦痛と疲労で青ざめた顔色になりながらも、御琴は一拍置いて続けた。

「霜霧……成光……！」

彼女に、成光は微笑んで答えた。

「流石、最年少で尊暝を任されるだけある。その事情はよく知りませんが、貴女の父、辰人たつひとはどうなされたんです？」

「……殺されました。三年前の夏に」

「ほう、それはお気の毒に」

「ふざけるな！！」

叫んだのは、それまで二人のやり取りを見ていた皇馬だった。

「貴様が殺したんだろが！ 頭首の、目の前で！！」

「……皇馬」

冷淡で落ち着きを払った声音で、成光は言った。憎悪の込められた両目が、皇馬を見据える。

「唯一、己に与えられた役目さえ果たせない男が、ほざくなよ」

「っ！ 成光！！」

皇馬の右手が、成光を向いた。青白い光が収束し、僅か一秒という時間で言霊も無しにやってのけるのは、側近の座に付くだけのことはある。

光は、皇馬の怒りに流されるように成光を射抜き 寸前で別の障壁に阻まれた。皇馬を阻んだのは、別の術師二人だった。

「落ち着け、皇馬！」

皇馬の横に立っていた術師が言う。

「だが」

「その男の言うとおりだ」

成光の声。見ると真改の刃先が、僅かに首の肉に食い込んでいた。赤い血が、一筋の流れとなる。

「危なかったな。もう少しで脈を刺してたぞ」

台詞とは裏腹に、成光は面白そうに笑っている。いい様に弄ばれたことで、皇馬はまたしても怒りを覚えた。それを抑えたのは、御琴だった。

「……成光」

倒れて血を流しても尚、凜とした口調で御琴が言った。

「目的は、何ですか？」

少し考えた後、刃はそのままに彼は答える。

「…どの目的のことですか？」

「あなたが、此処に来た目的です」

ほう、と成光は漏らす。どうやら彼の関心を引いたようだ。

「我々の目的ではなく？」

「それは、またいずれに。あなたを送り込んだ者に聞きます」

「…何故、私が送り込まれたと？」

僅かに冷淡さを取り戻した成光に、今度は御琴が微笑んで返す。

「あなたは、人の上には絶対立たない。素質があってもそれを良しとせず、常に一人の、ただの霜霧成光で在り続けようとする。そう言う人間だと、知っているからです」

一瞬、成光はその殺気を露にしたが、すぐに元の表情に戻って続ける。

「……全く、参った」

苦笑してそう言うと、彼は皇馬を見た。

「本当は、この総本山陥落が目的だったんだがな。残念だ。ここを、妖力室を貰っておこう」

「なにを」

言いかけて、皇馬は続けられなかった。

天井から生まれたように、それは降り立つ。醜いといしか言い様のない、崩れた姿。どこかの三流魔術師が、死体合成に失敗したような。哀れみすら覚える感じだ。昨夜、みずち達が同じモノと対峙し、勝利したことを知る者は、ここにいない。

出現したのは、全部で十体。

「これは……魑魅魍魎！？」

感じ取った妖力を元に、御琴は推測で叫んだ。だが驚愕する彼女に、変わらない口調で成光は答える。

「少し違う。アレは、いまあなたが言ったものを元に創った、人工

物。よく働いてくれる、我々の手駒だ」

笑い混じりに言うと、成光は何のモーションも無しに跳躍してみせ、部屋の奥に着地した。

「俺は手出ししない。だが、気を付けるよ。そいつ等は凶暴だ」

それが言い終わるかどうかの内に、すでに魍魎の一体は動いていた。

「が…ごあつ！」

不気味な叫び声とともに、術師の一人へと飛び掛った。

「くっ」

寸前で回避したが、別の一体が更に襲いかかる。

「ひっ！」

「伏せろ！！！」

皇馬の叫びを聞き、その術師は瞬時に身を伏せた。いままで頭があつた空間を、青い閃光が駆ける。光は吸い込まれるように真っ直ぐと魍魎に向かい、その身を貫いた。

「一体目だ」

皇馬が呟く。それを皮切りにしたかのように、一斉に魍魎達が襲い掛かってくる。術式の最中だったために、いまはそれぞれが孤立していた。たちまち二人は、魍魎の餌食となる。

「固まつて応戦しろ！ はぐれるな！」

皇馬が瞬時に指示を出せたのは、それまでに培ってきた経験からだ。尊瞑家は、妖法番でも管理者という立場のため、実戦経験のあるものが少ない。この場にも、皇馬を含めて三人だけしかない。

「与一、皆を逃がせ！ 勝雅、頭首を頼む！ 俺が援護を」

ひゅん、と風を切る音。戦闘でそれなりの場数を踏んでも、皇馬のように避けられる者は少ないだろう。真改を振るつた成光を睨んで、皇馬は殺意を剥き出しに叫ぶ。

「手出しをしないと云っただろうが！」

続け様に三発、閃光を放った。しかしそのどれも、成光は老いを感じさせない動きで避ける。すつと、成光が前に出た。

「お前は規格外だ。俺と同じな」

下段から斬り上げる斬撃を、二歩分後ろに下がってやり過ごした。だが息つく暇もなく、今度は上段からの斬り返しが皇馬を襲った。

「規格外同士、仲良くやろうじゃないか？」

刃が身を裂く手前で、瞬時に横に飛んだ。だが、右手に痛みが生まれる。回避したと思っただが、掠っていたらしい。綺麗に裂かれた着物の下に、一直線の赤い線ができていた。

「ふざけたことを」

「げえっ！」

喉笛を潰されたような、それは断末魔だった。同時に、生理的嫌悪を誘う鈍い音。見ると、御琴を任せた術師が、魍魎の拳を腹部に受けて吹っ飛んでいた。傍に別の魍魎が二体いるところを見ると、どうやら三体を同時に相手していたらしい。

「頭首！！」

叫ぶより早く、皇馬は駆けていた。横風の閃光が、魍魎二体の胸を裂く。僅かに閃光の逸れた残りの一体が御琴に飛び掛るが、それより早く皇馬の膝が頭蓋を砕いた。

「頭首！ ご無事で？」

「は、はい」

「皇馬！ 早くしろ！ 長くは耐えられん！！」

妖力室の出入り口で応戦を続ける術師が、二体の魍魎と対峙しながら叫ぶ。

「封鎖しろ！ 俺達は転移する！！」

「！ わかった！」

皇馬の指示は正しかった。討伐者でない尊瞑家では、元霜霧の成光率いる妖を喰い止められない。別の家系、竜峰や弦、もしくは成光と同じ霜霧家の援軍が必要だ。皇馬の意図を察した術師は、すぐに部屋の扉を閉じる。

「頭首、少し辛いかも知れませんが、勘弁してください」

言って皇馬は、空間転移のための妖力を収束した。だが、

「！ 皇馬！！」

「！？」

皇馬に反応する暇は無かった。成光が繰り出した真改は、皇馬の右胸を貫いて、御琴から数センチの距離で刃を止める。

「余所見をすべきじゃなかったなあ、皇馬」

「……く……お……」

真改が引き抜かれ、支えを失った皇馬の体は御琴の足元へ倒れこんだ。息はあるが、致命傷なのは誰の目にも明らかだった。

「こう……ま……？」

眼前の惨劇を、御琴は現実だと認識できなかった。

「こう……ま……こう……ま……」

夢だと、ただの悪夢だと言い聞かせるように、御琴は名を呼び続ける。

だが彼女ににじり寄る魍魎達にとっては、そんな行為に意味はない。無抵抗ならば、喰らう時に体力を無駄に消費せずに済む。それだけだ。

「……とう……しゅ……すいま、せん……」

擦れた声で、皇馬は最期となる言葉を御琴に伝えた。同時に、再び自らの血で汚れた両手が、光を灯した。

「ほ……う、ぜん……たのむ……」

皇馬の命を吸収した灯火が、御琴を包む。重力を無くしたような感覚の中、御琴は別の場所へと送られていた。

ふっと、皇馬の視界に何者かの足が映った。声を聞かずとも、それが成光なのはわかつている。

「呆れたな、お前達には」

そんな男の声を聞いたら、何故か笑いが込み上げてきた。

「……ふ……ふふ……」

ひどく重い体を、皇馬はなんとか起こして肩膝を付く格好になる。成光を見上げると同時に、首筋には僅かな刃こぼれすらない真改が当てられる。

「何がおかしい？」

興味を示したような声音で、成光は尋ねた。

「俺の、勝ち…だな…今度は……守り、きつた…」

最後の悪足掻きのつもりだったのか。瀕死の男に勝利を宣言されて、成光の口元が歪んだ。

「く…くくく……はははははは！！」

刃を突きつけたまま、成光は狂ったように笑う。皇馬もまた、時折、その口から鮮血を撒き散らしてほくそ笑む。

皇馬は、死を受け入れている。なので、突然に成光の笑いが止まったことも、真改が喉元を離れて上段に構えられたことも、なんら不思議だと感じなかった。

「その通りだ」

愉しそうな成光の声が聞こえた時、同時に神速で振るわれた刃が、皇馬の頭部を肉体から斬り離していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8192g/>

妖法番

2010年10月9日22時34分発行